

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	時空の転換と子どもの神性 : 「ひぐれみち」という境界領域からの触発
Author(s)	葛西, 琢也
Citation	児童の言語生態研究 , 16 : 40 - 48
Issue Date	2004-02-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045190
Right	
Relation	



時空の転換と子どももの神性

「ひぐれみち」という境界領域からの触発

葛西琢也

はじめに

荒いデッサンのようなものではあるが、以下に述べるのは、時空の転換というイマジネーションから、子どもの神性に近づこうとする試みである。「ひぐれみち」という境界領域が子どもたちの潜在意識を賦活していると考えてみた。また、時空転換のイマジネーションを人間本来の創造性の発露、命の発露と考えようとしている。

1 夕日作文と子どもたち

子どもたちが夕日と向かい合っていると、どんな状態になっていくのかよ

く分かる作文がある。「夕日という題で作文を書きなさい。夕日と聞いて、今心の中に広がった思いをそのまま書きなさい。」と指示した。(1)

資料1

夕日の印象

6年・女子B・T 昭和61年度

夕日といえば、このごろは、ビルや家のこんでいるところにきえてゆく夕日しか見ていない。さらに最近になってからは、夕日を見る機会もない。

それでも学校の帰り、冬になると、もう日がしずみかけている時がある。そんな時はなぜかさみしい気がする。

この学校に来る前は、家の近くで、5時の音楽が鳴るまでみんなといっ

しよに遊んでいた。

そのころはよく夕日を見ることがあった。ちょうど5時ごろ、音楽が鳴り、それと一緒に雲がうすい赤から、えんじ色に変わっていく。5時の音楽は、「夕やけこやけ」何とタイミンクのいいことだろう。私は、思った。けれど口には出さなかった。みんなもただ「じつ」と夕日を見つめていた。だけど、「みんな、私と同じことを考えていたにちがいない。」と私は思った。

決まって5時に流れる音楽なのだから、タイミンクがいいと言うようなことではないと思うが、そう言わせてしまふ気分の中にあることは感じられる。夕日を「じつ」と見つめている子どもたちは、きっと私と同じことを考えて

いたに違いないといっている。文脈からは、夕日と向かい合っている子どもたちには、「夕焼けこやけ」の音楽がいいタイミンクだと、皆もそう思っているに違いない、そう解釈される。音楽がこの時の子どもたちの思いをさらに増幅するか、沈潜させたか、いずれにしてもその時の思いに重なっていた。でも口には出さなかった。口に出さなかったのは、「じつ」と夕日を見つめている皆も同じ気持ちでいるにちがいないという確信があったからである。この確信がどこから来たかといえは、夕日に魅入られ、夕日に没入してしまうのが私たちであるという、人間理解がこの筆者には既にあつたからだと考えたい。

夕日

6年・男子H・K 昭和61年度

夕日といえば、過去に二度ほど経験がある。

一度目は、冬期講習の時。二時から六時までの五時間もの間、椅子にすわりっぱなしのまま先生の授業を聞いていた。うんざりしている時、何かおもしろいものはないかなあと、窓の向こうの方を見ると、ビルとビルの間にはちょうど真つ赤な空と真つ赤な太陽があるのです。その時以来、その景色を見ると、ほくほくも気分がうっとりするような感じがして、何かいいことでも起きそうできうきうきしてとても気持ちがいいのです。

二度目は、一年前のお盆の時、ちょうどひまができて新潟に行っていた時でした。その日はいい天気だったので、親戚のことほくたち兄弟で海水浴に行きました。その浜は人がいなくてとても静かでした。みんなで沖合い三百メートルぐらい先にあるテトラポットに行くことになりました。

みんなで泳いでそこについてはるか向こうの方を見渡すと、水平線の向こうの方に、沈みかかっている

真つ赤な太陽がありました。そして、あの太陽が沈んだらかえることにしようと、みんなで話しました。あの時の夕日の景色が、僕の心にびったりとこびりついていて、今でも忘れません。

新潟の海で見た水平線に沈む夕日、これは、忘れられない思い出の夕日と言っているが、もう一方に今は注目したい。長時間の授業に飽いた時、ビルとビルの中の真つ赤な空と真つ赤な太陽が視界に入った。その時以来、その景色はこの少年をうっとりさせ、何かいいことが起こるよううきうきした気持ちにさせるようになった。夕日に心奪われ恍惚状態にあったということだが、それが何度も起こるようになった。ここに、私たちは夕日が浄化作用をもたらしていることを認めることができる。夕日と向かい合うことで授業にうんざりしていた状態から、疲れを払拭し心なごんだなおかつ元気にあふれた状態に戻っているからである。これは、夕日との共鳴状態に入った例と考えられる。夕日との間にイメージ運動を起こすことが人間生感であるとして、この場合、ビルとビルとが形作る枠、いわば窓枠による視界の限定がその誘発に大きく関わっていると考える。視界の限定と

は空間の限定でもある、そのことによつて、別次元が生じるからである。先の(資料1)の場合、「じつ」と夕日を見つめていた子どもたちにも、イメージ運動が生じていたと考えられるが、音楽がその発生の契機になったものと思われる。音楽にも、別次元を生じさせる力があるからである。次に引くのは、言ってみれば、穴が別次元発生の契機になったと思われる例である。

資料3

夕日の思い出

6年・女子S・K 昭和61年度

最近、夕日というのを見なくなりました。学校から帰ると、もう空は暗く私にかぶさってくることもありまし、一つのへやにいと知らないうちに、空に色とりどりのネオンがまたいたっていました。

夕日といわれて思いつくものといえば、商店街でしょうか。小さい頃、お母さんに手を引つ張られて買い物についていくと、帰りにアーケードの出入り口をくぐる時には決まって空はだいたい色でした。まるで、夕日いろのうすい本当にうすいペールが自分にふわりと落ちてきそうので家に戻る時は、ずっと上を見ながら歩いていたらのように思います。その頃

から、私は何となく、真つ赤な太陽が沈んでいくのより、その太陽のまわりが、ぼおつとだいたい色に光っているのが好きだったような気がします。

その頃は、なぜ空の色ってこんなにいっぱい変わるのだろうかと思議でした。今では、いくらだいたい色の空を見ても、そう思わなくなつてしまいました。けれど夕日を見る度に、あの時のだいたい色と変わらななんだあと、また小さい頃のことを思い浮かべます。

アーケードを通り抜けると、視界が開ける、そしてその頃には空はだいたい色になっていったということになる。「トンネルを抜けるとそこは雪国だつた」というのもこれである。これはもはや別次元の発生であり、イメージ運動が始まったということだと考えられる。「夕日いろのうすい本当にうすいペールが自分にふわりと落ちてきそうで」という言い方で、だいたい色の光りに満ちた別空間にいる自分を捉えているのだと思う。黄昏時の商店街を歩いている自分を客観的に捉えているのではなく、イメージ世界のことと考えなければならぬし、その時のイメージ運動を懐かしく思い出しているのだと言え

よう。

以上三つの資料はそれぞれ、夕日と音楽、夕日と窓枠、夕日と穴、というイメージ運動触発の要因とも言うべきものを示している。合わせて、それを別時空の触発として考えようとしている。夕日はそれ単独でも、相対するものの子どもであろうと大人であろうと、イメージ運動触発の要因となるから、相乗作用が働いたと思われる。あとの二つの組み合わせなど、北斎の「富嶽三十六景」を思い出してしまう。富士と夕日を置き換えれば、同じ構図をいくつつか取り上げることができる。このことは、粹や穴がイメージ運動触発の契機となつて作用していることを語っている。また、北斎と現代の子どもと、イメージネーションの相型において共通項があるということであり、イメージネーションの伝承ということも考えられてくる。



「ひぐれみち」の境界領域

夕日がイメージ運動を触発するのは、現実世界と潜在世界の境界領域を照射するからである。同時に、夕暮れという時空も境界領域として考えられる。昼から夜への境界の時間であるということである。夕日と向かい合う、夕暮れと

いう時空に身を置くことで、われわれの意識世界が呼応し、イメージの反転・転換が起こるといふことだと考えられる。夕日の赤と、天空の刻一刻の変化、これに人は触発されるのであろう。わざわざ持ち出すまでもないことであるが、「落日」を写し取った名文である。私どもの五年生国語の教材に、「和漢混淆文を読む」として、徳富蘆花の「自然と人生」が選ばれてある。その内の「相模灘の落日」から。(2)

初め日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山は煙の如く薄し。日は所謂白日、白光爛々として眩しきに、山も眼を細うせるにや。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山次第に紫になるなり。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山紫の肌に金煙を帯ぶ。

此時濱に立つて望めば、落日海に流れて、吾足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も赫焉として燃えざるはなし。

已にして日愈々落ちて伊豆の山にかかるや、相豆の連山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の巔舊に仍つて紫上更に金光を帯ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜みそめぬ。日一分を落つれば、海に浮かべる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧み勝に悠々として落ちゆく。

刻一刻の変化相がよく分かるところだけを引いたが、この変化相にイメージ世界は激しく感応するのだと考えられる。蘆花はこの時の境地をこう言っている。

斯かる風の夕べに、落日を見る身は、恰も大聖の臨終に待するの感あり。莊嚴の極み、平和の至り、凡夫も靈光につつまれて、肉融け、靈獨り端然として永遠の濱にイむを覺ゆ。

次は、現代の小学校6年生が捉えた夕暮れ、その変化相である。

資料4

夕日

6年・男子Y・S 昭和61年度
夕日は赤い。その赤が雲に反射し、昼間は白い雲が赤になる。ぼつんと浮かぶ赤い雲、びつしりならば赤い雲。雲は毎日表情を変える。だから空の表情も毎日変わる。雲の中をぬうようにカラスが飛ぶことだつてある。雲をつきぬけて一直線に飛ぶことだつてある。赤い運動場を二羽で追いかけてまわることもある。時に

は、つばめたちがすばしこく飛んでおどっているように見える時だつてある。

「ゴオー」

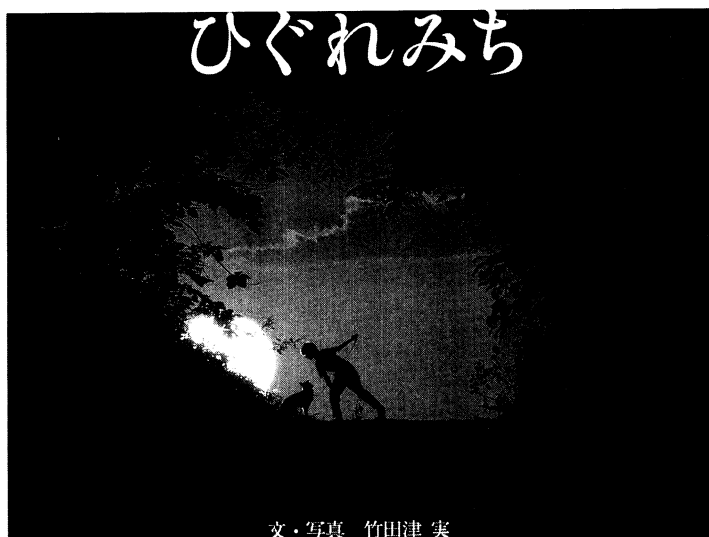
赤い空に向かって急行電車が吸い込まれていくことだつてある。赤い空から吐き出されて、第一の駅に止まる時だつてある。しかし、そういう風景もいつの間にか見えなくなり、かえるがいつせいに鳴き出す。(中略)

夕日の赤といっしょに星も月もかがやきはじめる。南の空高くに光る上弦の月。東の空から顔を出すぼどう色の満月。白い光を放つ一等星。とてもコントラストがよい。みんなひとつ。赤、黄、白。みんなひとつでかがやいている。間もなく空は色とりどりに染まり、その屋根はグルグルとまわり出す。東の空にも、米粒のようにピルの光が見えてくる。

これは夕暮れの写生文ではなくなっている。この子が見ているのはイメージ世界からの投影すなわち景色である。観察の眼、写生の眼によって見えてくるのは景色ではない。既に境界領域のなかにいるから、「赤い空に向かって、急行電車がすいこまれていくことだつてある。赤い空からはきだされて、第一

の駅に止まるときだつてある。」というこの世ならぬものが見えてくる。奇を衒っているわけでもなく、ふざけているわけでもない。

「ひぐれみち」(文・写真竹田津実 世界文化社)という絵本がある。と言つても写真で構成された絵本である。以前から、「絵を見て作文を書く」という試みが続けているが、この絵本の表紙に着目した。



文・写真 竹田津実

絵本「ひぐれみち」表紙

草むらと木々でできたトンネルの向こうに、真つ赤な夕やけの空、赤く染まった一筋の雲が見えている。日は白い光を放ち沈みかけている。中央に犬をつれた少年のシルエツトがある。絵本の題名と作者名等が、白抜きで入っている。周囲に白い枠が取つてある。これらがそれぞれ相まって、イメージ運動を触発することになると考えた。夕日と夕焼け空の境界領域は言うまでも

ない。画面の大部を占めるトンネルのシルエツトは先に述べたように、穴としてこちらの現実世界とあちらのイメージ世界を隔てることになる。これを考えることは、これを絵本であるということ、本として現実世界に在るものであると同時に、それは虚構性や想像世界を内に含んでいる。つまり、絵本そのものに境界領域を認められるということである。このように、2重3重の境界領域の入れ子構造として「ひぐれみち」は在る。

資料5

ひぐれみち

6年・女子A・Y 平成10年度
とある田舎町の小さな町に、少年はいた。少年は、ここに引越してきてからまだ日が浅く、友達といえるのは、飼っている犬だけだった。この犬は、まだ少年が幼かった頃に、捨てられていたのを拾ったのだ。あれから5年も経ち、言葉が通じなくても、互いの心が伝わるようにまでになった。

少年は、今日も普段通り学校へ行った。少年は学校があまり好きではなかった。周りでは話し声が聞こえてくるのに、誰一人として彼に話しかけるものがない。少年には、自分がガラスの壁でできている部屋に閉じ込められているように感じられた。しかし、これくらいは毎日のことだった。今日は、少年にとって最悪の日であった。算数の授業で少年は先生に当てられ、ちんぷんかんぷんな答を言ってしまったのだ。教室には笑い声が響き渡った。先生も少年に放課後に残るよう言った。少年は地獄にいるような気分になった。

少年は放課後残って勉強した後、真つ直ぐに家へと向かった。彼の犬

に会うために。そして、二人で日の暮れかかる道を走り山へ向かった。空は深紅に染まり、太陽が沈んでいくところだった。少年と犬はこの風景が大好きだった。何故なら、少年が引越す前に住んでいたところでも、同じような夕暮れを見ることができたからだ。少年は昔の友だちのことを思いながら、太陽が完全に暮れるのを見届けていた。太陽が見えなくなり、夜が来ると、少年は彼のいぬと家路を急いだ。そして、少年は心に決めた。明日こそ友達を作り、その友達とあの夕陽を見よう、と。

明るく朝、少年は校庭でいつも野球をしている少年と道で会った。少年はまず彼と話してみることにした。

「おはよう、太郎君。元気かい。」
「ああ、元気だよ。そうだ、君も野球をしないかい？」

引越す前、野球部に入っていた少年は、彼の言う通り、朝野球をすることにした。思っていたより他の生徒達も優しく、もともと実力のあった彼のことを、すぐに認めてくれた。野球仲間と話題になったかれは、他の生徒にもしだいに人気が出てきて、彼に話しかけるものも以前より断然多くなった。友達も多く出来

た少年は、久しぶりにあの場所に行こうと考えた。

少年は何人かの友達と犬を連れて、山へ行った。あの日と同じように空は深紅に染まっていた。

「こんなに近くに素晴らしい景色の見える場所があったなんて……」

友達はみんなびっくりし、同時に少年に感謝をした。少年は、友達と夕陽を見たいという願いがかなって幸せだった。日暮道を犬と二人で歩いてきた日々が、嘘のように思えた。

太陽が沈んでも、少年の太陽は、永遠に沈まないだろう。

これまで見てきた資料1から4までをこの世の夕日を見ていたものとすれば、これはあの世の夕日、つまり夢の夕日ということができよう。こうして物語性が色濃くなったのは、やはり「ひぐれみち」に備わった、入れ子状態の境界性の故だと思ふ。また、先の資料1から4までには比べ別時空への転換の色合いが薄いのは、3、4年生の意識世界の転換が済んで、顕在世界を分母とし、潜在意識世界を分子とするようになった子どもたちに、言わば応用課題を出したことになるからであろう。

ここに用いる(資料5、6、7)は、この絵本の表紙を見て、心の中に広

がってきたことを書きなさいと指示して書いてもらったものである。卒業を間近に控えた六年生3人のものである。一読してみて無心の発動性に従った作品と感ぜられる。単なる作り話ではなく、イマジネーションの発動と、それに素直に従うことなくしてはできなかった話であると思う。更に具体的に検討してみることにする。

この作品を全体構想と見るのは、主人公の少年がイメーজの誘導に従っているからである。ここで言う全体構想とは「起承転結」のような文章構成を考えているのではなく、時間空間の設定すなわち世界定めを考えている。学校で地獄にいるような気分になった少年は、犬といっしょに沈んでいく夕日を見るために山に向かう。そこからの眺めが少年と犬は好きだった。なぜなら、その場所は、引越してくる前に住んでいた町で、いつも少年が見ていた夕日と同じような夕日を見ることができるところだったからだ。そこで少年は昔の友達を思い出し、新たな出発を誓う。ここに時間空間の設定に関わる二つの重要な観点が浮き彫りになっている。そのひとつは、このように「懐かしさに浸る」「思い出にふける」「母の懐に抱かれる」など、過去に戻ることで未来へ進むエネルギーを得、展望を得る、このようなイメージ運動をイ

メーজの邂逅性と呼んでいる。(3)このイメージの邂逅性に導かれて、時間空間の転換が生じた。離れた2点間であるのに、そこに立つ者は浄化作用によって同じ安らぎを得る。人間との関係において、同じ作用を及ぼすような時空への転換、これはトランスフォーメーションに違いない。地理上の離れた二つの地点が、イメージ世界によって裏打ちされているということである。ここに示された全体構想は、「ひぐれみち」が顕在意識世界と潜在意識世界との境界領域から触発したイマジネーションであり、人間本来の創造性の発露と考えている。

では、このような時空転換のイマジネーション、具体的には(資料5)のような潜在意識世界からの話は人間成長と関わりを持つのか持たないのか、関わりがあるとして、どのような位置づけにあるのか、これが次の問題になる。その答は既に(資料5)の話の中に用意されていたように思う。転校したばかりの新しい学校での八方ふさがりの人間関係、主人公の少年は、この逼塞状態打開のエネルギーを夕日から得ている。夕日は、顕在意識世界と潜在意識世界との境界領域を照射する、そのことによって、イメージ世界に反転・転換が起こったと理解できる。このように見ると、この(資料5)が語っている

のは、作品のなかの少年の生き方ばかりでなく、作者自身のこの人の世を渡っていく姿勢でもあった。この小学校6年生の作者は、顕在世界と潜在世界と二つの世界を生きていると認めることができる。

人が生きていく時空を、顕在世界だけとせず、イメージ世界に裏打ちされたものとした時、「夢を生きる」(4)という言い方が出来るのだと思う。河合隼雄は「意識と無意識の相互作用によって、そこに意識のみの統合を越えた高次の全体性への志向が認められてくる。このような過程を通じてこそ真の個性が生み出されてくる」と考えた。人間存在の捉え方が根底から違ってくるのである。

この作品には、人の生活の、ひとつの局面でどう行動するのか、何に従って行動を起こすのか、その全体構想が語られているのだと思う。これはその一例であって、人それぞれさまざまな全体構想の上に、人の人生は重ねられていく。その重ね具合を見て、まだ若い青くさいといってみたり、やっとな現実になってきたなどと言って批評するのだろう。

世界定めとは、歌舞伎の用語である。これを全体構想という代わりに世界定めと言い換えたのは、上原輝男先生であった。全体構想では、文章構成上の技術指導と紛らわしく、誤解が生じる恐れがあったからであるが、日本人の発想、論理を解き明かしつつ、日本の子どもたちの国語教育のあるべき姿を考えていた先生ならではの命名であると思う。

歌舞伎役者は「十一月の顔見せ興行の世界はまだ決まっていない。」などと、今でも使っているそうである。歌舞伎の年中行事のひとつで、九月十二日に一座の主だった者たちが集まり、十一月に開演する興行の「世界」を決める行事が、これも今でも続いている。

江戸後期に成った「世界綱目」という本には、時代の世界(47)、お家の世界(18)、世話の世界(52)、男伊達の世界(9)などと項目ごとに世界を列挙してある。そこである「世界」とは、作品全体の背景となる時代及び事件、そしてその事件に関連して登場する一定の人物群の類型を指して言う。(5)これは、時間と空間と人間(じんかん)のことである。

この時間と空間と人間をどのように捉えまとめようとしているか、これが全体構想である。ひとつのまとまった世界、これがどう形成されようとしているか、そこに成長の跡を見いだそうということがある。先の(資料5)は、「ひぐれみち」に触発された「世界」であるといえるが、それが可能になるのは、あの写真が「ひぐれみち」というひとつの確定した世界を捉えていたからにはかならない。

資料6

ひぐれみち―老人編―

6年・男子M・S 平成10年度
私は歳をとってしまった。今では、一日のほとんどをこの部屋の中で過ごしている。

私は自然が大好きで、歳をとり仕事を辞めてからは、都会を離れてこの山の中で暮らしている。少し前までは、鳥の鳴き声で目を覚まし、朝食を済ませたあと、この山の中を散歩していた。そのときに、私はいくつかの散歩のルートを決めていた。その中でも、特に私が気に入っていたルートがある。そのルートをなぜ好きだったかという点、その散歩道を歩いていると、何だか自分がまだ幼かったころに散歩した道と同じ道

を歩いているような気がしてくるからだ。そして、ある日そのお気に入りの散歩道を日暮ごろに歩いていたら、木と木や山の間から、とてもきれいな夕焼けを見ることができた。この夕焼けはとてもきれいだったのでも、その後もずっと覚えていた。そして、私はその夕日をまた見たいと思ひ、それから毎日毎日その散歩道をひぐれ時に歩いてみた。しかし、あのきれいな夕日を見る前に、私は歳をとってしまい、とうとう自分で夕日を見に行くことができなくなってしまった。

今では窓から見える景色や鳥の声でしか季節の移り変わりや時間の移り変わりを知ることしかできなくなりました。それでも私はこの山の中の様子が大好きで、一日に何度も何度も窓際に行った。

それから私はいつも同じような一日を過ごした。

そして今日もいつもと同じような一日を暮らしていた。私は少し疲れてうとうとうとしていた。気がつくとうあたりの様子がいつもとは違っていた。それは待ちに待った「夕焼け」だった。私は夕焼けに見とれて、ずっと空を見上げていた。そして夕焼けのあまりのまぶしさに、目がくらんでそっと目を閉じた。すると、

ひぐれみちの木々のトンネルの間から真っ赤な夕焼けがのぞいていて、そこにはまだとても幼かったころの私があった。

ひぐれみち―少年編―

僕は、小学校を卒業して、春休みに海の近くにある町から山奥へ引越してきた。僕は海が大好きで、海の近くに住んでいたときには、休みの日には海で、魚を釣ったり泳いだりしていた。今度住むことになった山は、前に住んでいた海とあまりはなれていないのに、海に慣れていた僕には全くの別世界だった。

引越してから少したって、友達ができかけた。その友達は、夏になると川で泳いだり魚を釣ったり、ハイキングをしたりもできると言っていた。しかし、僕には川で泳いだり魚を釣ったり、山でハイキングをして遊ぶよりも、海で魚を釣ったり泳いだりして遊んだ方が楽しいと思っただ。だから、僕は夏休みは、山でも遊べるけれども、海の近くの町へ帰って遊ぶうと思っていた。そんな僕に友達達は山の花や虫の名前を教えてくださいたり、いろんなことを説明してくれたが、僕にはあまり興味がないことだった。

四月に入って、桜の花が満開になった。中学校に入って新しくできた友達、僕のこと誘ってくれた。僕はあまり気が進まなかったが、とてもよい天気だったので、愛犬のアンジェロをつけて、一緒に歩いて行ってみることにした。山の中は海の方に比べてとても涼しいように感じたが、皆で山を登っていくと、汗がにじんできた。新しい友達ともいろんな話ができるようになった。そして皆で見た桜の花はとてきれいだ。いつの間にか夕暮れの時間が近づいていた。僕たちはあまり遅い時間にならないうちに家に帰ることにした。そして、また皆で話をしながら山をくだっていった。山の道の曲がり角を通りすぎようとしたとき山の本々の間から真っ赤な夕日が見えた。それはとても赤い夕日で、何だか体の中があつたまる気がした。友達が「夕日がいよいよ明日もきっと晴れるだろう。」と言った。そして僕たちは明日もこの山に遊びに来ることを約束した。そして、僕はあの海と同じくらいこの町も好きになるかもしれないと思った。

老人編と少年編の二つを書いた所に、この作者の世界定めを認めることができる。これを、大項目の「世界」とすれば、小項目ともいふべき老人編では、イメージ運動の適性に導かれ、老人は、幼いころによく歩いた散歩道を思い出している。そして、ある日、待ちこがれていた素晴らしい夕日を見ることができた。その真っ赤な夕焼けの中に幼いころの自分を見だしている。来し方行く末というが、過去へさかのぼる思ひは、同時に未来をも照らし出す。しかし、この老人は死期を間近にしているようにも感じられる。生と死と、その間にひとりの人間の一生が詰まっている。小項目の「世界」はこのように感じられる。

少年編で、ぼくは転居したばかりである。新しい土地にはなじめず、人間関係にも慣れていない。そんなある日、山の中で、体があつたまるような、真っ赤な夕日を見る。その時、僕は、新しいこの山の中の土地を、以前住んでいた大好きな海辺の町のように好きになるだろうという予感に包まれる。こちらでは、イメージの子見性が働いている。老人と子ども、生と死、思い出と希望と、予見と諦念、人生を丸ごと内包してしまうほどの世界定めがある。こうして、夕日が照らし出す世界は、生命燃焼の世界ということができそう

である。それにしても、死期を間近にしても、生命燃焼、イメージネーションは衰えないものなのだろうか。(資料6)は現世がその物語世界であったが、次の(資料7)には来世も加わって来る。

資料7

ひぐれみち

6年・女子 O・Y 平成10年度

少年と犬は、楽しそうにじゃれ合いながら、ひぐれみちを歩いていた。だから、その一人と一匹はとも幸せそうに見えた。

でも、少年と犬には帰るところがなかった。

犬の名前はタローという。少年が付けた名だ。少年の名前はタカシという。しかし、これは誰が付けた名か分からない。タカシはみなし児だった。

でも、もう、タカシのことをタカシと呼ぶ人はいない。長いこと面倒を見てくれていた親切なおじいさんが昨日、死んでしまった。家に役場の人が来ていた。だから、タカシとタローには今日、そしてこれから、帰るところは無い。

「少し休もう、タロー。」タカシは立ち止まって言った。

「うん、そうしよう。」タカシは

タローの言うことが解る。

「タロー、フランタースの犬、って知ってるか。」

「何、それ。」

「本の名前さ。いつか、ゴミ捨て場で拾って読んだ。」

「へえ。」

「アントワープ、とかいう所に、じいちゃんと一緒に、ネルロ、って男の子と、パトラッシュ、って犬が住んで、牛乳運びをやってるんだ。」

絵が好きで、将来は画家になりたいと思ってる、ルーベンス、って人の描いた、教会に飾ってある絵を見たがっている。だけど、それは、お金を払わないと見られない絵なんだ。そのうち、じいちゃんは死んだ。ネルロとパトラッシュはみんなに冷たくされて、教会で、一緒に凍え死んでしまう。でも」

「でも、何？」

「死ぬ前に、ルーベンスの絵を見られるんだ。」

「……」

「僕達も、死んじゃうのかな」タカシはタローを抱き締めた。

「でも、タローと一緒に……じいちゃんの所に行けるなら、それでもいい」

「僕も」

背後に気配を感じ、タカシは振り返った。黒いマントを纏った貧相な

男が立っている。どこか、じいちゃんに似てる。そうタカシは思った。

「誰だ。」

「わしのことか。」

「当たり前だ。何だ、その死に神みたいな格好は。」

「死に神なのだから、仕方あるまい。」そう言つて男は、右側の前髪を引っ張つた。

「あ。―じいちゃんと同じ癖だ。」

「どうした、タロー。警戒しないのか。」タローは、尻尾を張ちきれんばかりに振っている。

「死に神なんて、今時信じる奴いるのか。しかも、まだ明るいうちに出て来る、まぬけな死に神を。」男は左手の中指で眉間を掻いた。

「間違いない。じいちゃんだ。―

「じいちゃん。」男の目が輝いた。

「気付いてくれたか。」

「気付くよ。いかにもじいちゃんだもん。どうしてここにいるの?」

「話せば長くなるんだが…」

「話してよ。」

「…死者の国では、この世界の何百倍もの早さで、時が流れる。だから、わしが死んでから、もう十年が経つた。わしは、生きている時、若い時に戦争で人を殺したから、地獄に落ちた。でも、タカシとタローの面倒を見ていたから、死に神としての職

を得ることができた。わしは、エン

マ様のもとで、それは一生懸命に働いた。そうしたら、エンマ様がこう

言った。『お前はとてもよく働いたから、褒美に、願いをひとつかなえてやる。』と。その時、咄嗟にわしは

『再びタカシやタローとくらしたい』と。言つたんだ。生き返れたらいいな、と思つた。でも、生き返ることは許されなかつた。代わりに、…

死に神は言い淀んだ。

「代わりに、僕達を殺しに来たんだな。いいよ。覚悟はできてる。また、じいちゃんと、タローと暮らせるんなら、未練は無いさ。」

「それならいいのだが…」

「早く、殺つてくれよ。」

「違うんだ。」

「どう違うの…?」

「どちらか、片方、と言うんだ。」

「それは…」三人…二人と一匹は黙つてしまった。

「解つた。」死に神が言った。

「愛し合う二つのものを引き離すことは、わしには出来ん。わしが、願いを取り下げればいい。」

「でも、寂しいだろう。」

「しかし、お前達は、二人で一人だ。エンマ様とお話して来る。」そういうと、死に神は、忽然と消えてしまった。

「あのお人好しのじいちゃんが死に神だなんて、信じられない。しかも一生懸命働いている、なんて…今のことは、夢だったのだろうか。きつとそうだ。じいちゃんのことを愛しく思うあまりの夢―

「タカシ! タロー!」じいちゃんだ。

「エンマさまが…死に神を辞めてよい、と」

「それって…?」

「つまり、常に、お前達と一緒にいられるということだ…お前達の目に見える所からは消えねばならん。しかし、いつも、側にいるぞ。」

少年と犬は、楽しそうにじゃれ合いながら、ひぐれみちをあるいていた。だから、その一人と一匹は、とても幸せそうに見えた。

とても幸せだった。

ここでは、生死の問題が直視されている。ただしこれを、現実世界に置いて読めばただの作り話として片付けられてしまう。しかし、潜在意識世界と顕在意識世界、この二つの世界の間に生きているのがわれわれ人間であるという立場に立てれば、この話は、命の発露がこのような形をとつたのだと読めるのだと思う。名作「フランダーズの犬」を、O・Yさんの噴出するイメージが包み

込んでいる。人間が、生まれながらに持っている時空転換のイマジネーション、この発動に身をまかせていけば、おのずからこのような二つの世界の間で生きる自分とそれを包みこむ世界、そのような世界定めをするのではないだろうか。

河合隼雄がコスモロジーの形成ということを行っている。

「自分という存在を深く知ろうとする限り、そこには生に対する死、善に対する悪、のような受け入れがたい半面が存在していることを認めざるを得ない。そのような自分自身も入れこんで世界をどう見るのか、世界の中に自分自身を、多くの矛盾と共にどう位置づけるのか、これがコスモロジーの形成である。」(6)

これは、この資料を提供してくれた

3人を含めた、小学校高学年の子どもたちが直面している課題である。3年生4年生ごろから始まる、自己意識の獲得の後に明確に成つて来る課題であると考えられる。再び、河合の言である。「コスモロジーは論理的整合性をもつてつくりあげることができない。コスモロジーはイメージによつてのみ形成される。」(7)この指摘など、私たちが用いている方法、「絵を見て作文を書く」をまさに支持するための言葉に思える。つまり、子どもたちが書いてい

る物語は、イマジネーションの触発に成るものであって、子どもたちには「物語」という回路が無くしてはならないものであることが分かる。

じつちゃんの戦争での罪と罰、来世での願いとエンマ様のおぼしめし、人間の生と死、タカシのみなし児という境遇等の相容れない問題の存在、矛盾をひとつの世界としてまとめあげるこゝとが可能なのは、物語の世界である。物語の世界で、この作者がたどり着いた地点は、次のじつちゃんの言葉に明らかである。

「常に、お前達と一緒にいられるということだ……お前達の目に見える所からは消えねばならん。しかし、いつも、側にいるぞ。」

言葉を換えて言えば、「魂」にこの作者は行き着いたということであると理解できる。イマジネーションによる時空の転換を捉える、これが本当の意味で素直に感性に従うということだと思ふが、これによってどの子ども「魂」に辿り着くのだと思ふ。子どもたちが、顕在世界のみに生きるのであれば、魂の問題、祈り、啓示、超越者等は、その意識世界に現れないはずである。顕在世界だけが世界であるという人生においては、力関係、勝ち負け、成功か失敗かといった観点からの人間把握、自己確認に至ることにはほしくないか。

「ひぐれみち」という境界領域が触発したイマジネーション、これによってこの子どもたちがどのような世界定めをしているか、見当をつけることができたように思ふ。また、イマジネーションによる時空の転換、意識世界の住み替えを創造性の発露と認めることができたように思ふ。

大阪、四天王寺の西門念仏は、春秋の彼岸の中日、真西に沈む夕日は西門の鳥居の中に下降して行く、これを拝みながら念仏を唱え、極楽浄土に往生することを祈った。鳥居という枠で捉えた夕日、そのイマジネーションを昔から知っていたということでないのか。そのほかにも、夕日を観想するための理想的な時と場所をいくつも挙げることもできる。このことは、昔の人こそ時空の転換を生きていたのではないかと思わせられる。

■注

- (1) 『子どもの感情生活における浄化作用について』―「夕日」作文に見る子どものイメージ運動―小林照子「児童の言語生態研究」No.13 1988
- (2) 聖徳学園小学校(東京都武蔵野市)国語科のカリキュラム委員であった上原輝男先生の作成になる

- (3) 『子どものイメージの情動における仮説とその実証』上原輝男他「子ども文化の原像」岩田慶治編 日本放送出版協会 1985
- (4) 「明恵 夢を生きる」河合隼雄 京都松柏社 1987
- (5) 「江戸歌舞伎」服部幸雄 岩波書店 1993
- (6) 前掲「明恵 夢を生きる」
- (7) 前掲「明恵 夢を生きる」(東京・聖徳学園小学校教諭)

